

◆第70回マッセ・セミナー◆

社会的弱者への理解と共感

作家・有限会社「アミダ」代表取締役、
NPO法人「WANA関西」代表理事

藤木 美奈子

【プロフィール】

大阪生まれ。和歌山女子刑務所看守、人材派遣会社役員など、さまざまな職を経て、1990年より「アミダ」を設立（のち法人化「有限会社アミダ」）。1995年、雇用という形を選べない女性たちの経済的自立を支援するNPO法人「WANA関西」を立ち上げる。2003年大阪市立大学創造都市研究科入学、博士号取得（現在はホームレス、DV被害者などの就労困難者に対する支援プログラムを実践研究中）

著書に、「傷つけ合う家族～ドメスティック・バイオレンスを乗り越えて～」（講談社文庫）、「ストーカー・夏美」（講談社文庫）、「アホこそ社長にならんかい」（講談社）などがある。

【藤木美奈子オフィシャルサイト】 <http://www.fujikiminako.com/>

【藤木美奈子オフィシャルブログ】 <http://blog.fujikiminako.com>

はじめに

皆さん、こんにちは。藤木美奈子といます。冒頭に一つだけ聞いてみたいのですが、「この名前、知っている」と思われた方がいらっしゃいましたら、手を挙げていただけますか。ありがとうございます。実は私は、1999年に大阪府知事選に横山ノックさんと一緒に立候補しました。案の定、大敗しましたが、彼は230万票という空前の得票数で見事に当選されて、その後、見事に辞職されました。それで、もしかしたら皆さんの頭の片隅に私の名前があったかと思ってお聞きしたわけです。その次の選挙で立候補されたのが、あの太田房江さんです。もう一回出ようか出まいかとすごく悩みましたが、お金がないのでやめました。そんな経歴の人間です。

私はずっと、社会的弱者の権利擁護、地位向上に尽力したいと考えて生きてきまして、そこに力を注ぎつつ今後も生きていきたいと思っていたわけです。しかし、下から草の根で積み上げて社会的弱者の地

位向上を進めることがいかに大変かということに少し疲れた時期でもあったので、1999年は発作的に立候補することになりました。その経緯としては、今まで一度も女性が知事候補者が立ったことがないという歴史を知りまして、誰か一回ぐらいは女の子が立とうということになりました。それまでも横山ノックさんでいいのかという議論がありましたので、お金を集めて誰か出してもらおうではないかということで寄付を募りましたら300万円集まりました。しかし、出てくださいる方がおられず、仕方がないので責任を取って私が出たという形でした。

そのときに思ったことは、下からの積み上げも大事なことだけれども、やはり権力も重要だということです。どうして地下鉄にはいつまでもエレベーターがつかないのか。そのとき、まだ私の子どもも小さかったので、ベビーカーを担いで階段を上るたびに怒りに燃えていたことを今でもしっかり覚えています（笑）。

その後、ずいぶん状況が変わりまして、階段の横のエレベーターを見るたびに、社会的弱者に対する視線も変わってきたと実感はしていますが、当事者の立場に立った施策ができていくかという、まだまだ改善の余地はあるだろうと思っています。今は橋下さんが知事になられて、憲法記念日に「男女共同参画に貢献されました」ということで表彰してもらったのですが、(ドーンセンターのことを考えると)何か少し複雑な気持ちではありました。

ということで、本論に入りたいと思います。今日の「社会的弱者への理解と共感」というタイトルは大変幅が広いので、私は家庭内暴力の体験者、当事者であるという立場からお話をさせていただきたいと思っています。しかしながら、せっかくなので社会的弱者とは何かという基本的なことをさらっと習っていただいて、それから私の体験の話に入りたいと思います。

実は、私は1995年、先ほどのお話で言うと立候補する4年前に、日本で初めて、家族からの暴力を受けつづけた人間だと表明して本を書いた人間です。ドメスティック・バイオレンスと児童への性暴力という二つの問題を抱えた人間として社会に訴えたわけです。この問題は、それまでももちろんあったであろうことは感じられつつも、白日の下にさらされたことはありませんでしたし、家族というものはとても大切に何よりも優先される、これほど大事なものはないと皆が信じて生きていた中でそうした問題提起をするのは、大変勇気の要ったことでもありました。

この本を出して一番はじめに飛んできたのは、大手新聞社社会部の女性記者でした。大きな顔写真と一緒に、「家族からの暴力を出版」という形で新聞に記事が出ました。もちろん彼女は彼女なりに正義感を持って私のところに来てくれたのだと思いますが、そのインタビューの一番最後に「しかしながら、藤木さんも何らか反省すべき点はあったと今でも思っているんじゃないですかね」と聞かれたときに、頭の中が真っ白になったことを覚えています。どうして私にどこか悪いところがあったのか。子どものときに親から虐待を受け、結婚後また夫から暴力を受け

た人間に「何らか反省すべき点があるだろう」と言った記者の気持ちを、本当に計りかねたのです。今思えば、そういったことについてほとんど理解がない時代で、恐らくそれは社会部のデスクも同じであったろうと考えますと、そのような語りも取らなければ記事が通らなかったのかもしれないと善意に解釈していますが、今もしそういうことを言ったら大変な目に遭うだろうと思います。とにかく、そんな形でこの問題の告発が始まったのです。

それから6年目の2001年に、やっとDV防止法ができました。2000年、2001年には、児童虐待防止法、DV防止法、ストーカー規制法、高齢者虐待についてもそうですが、社会的弱者を擁護するための法律が続々とできました。弱い者をいじめてはいけないという極めて基本的なことが、法律でうたわれなければ守られない社会になったことが明白になったのが、この2000年前後の年ではないかと思っています。

しかし、そういった法律であるとしても、法律を作るということ自体は大変なことですから、国会議員の中にも色々なご苦労があったと思いますが、私は95年に本を出して以来、600回を超える講演を全国でしてきたわけで、そういったこともこの法律ができるに当たって何らかの後押しになったのではないかと自負しております。

今日の講演の中でお話しすることは、基本的に、『傷つけ合う家族〜ドメスティック・バイオレンス乗り越えて』(講談社文庫)という本が中心になっています。私自身の半生をこの短い時間で語り尽くすことは到底できませんので、詳しく知りたい方はこちらの本を読んでいただきたいと思います。

弱者とは誰か

(1) 社会的弱者とは誰か

「社会的弱者」を英語で言うと、「the socially vulnerable」になります。「vulnerable」という言葉自体には「傷つきやすい」「攻撃されやすい」という意味があるようで、「vulnerable group」と呼ぶ場合もあると聞いています。社会的弱者は大変傷つ

きやすい人であること、そして攻撃や差別の対象になりやすい人であるということが、この名前でもよく分かっていただけだと思います。

どんな人が弱者になりやすいのかというと、障がい者、女性、高齢者、子ども、不登校者、患者、在日コリアン、在日外国人労働者、被差別部落出身者、ホームレス等々です。しかし、これはごくごく一部で、例えば一人親になった人たちや、昨今随分取りざたされるようになった性的少数者といわれる人たちもここに含まれるだろうと思います。

上野千鶴子さんが書いた『当事者主権』という本の中に、「これまで周辺におかれ、ことばを奪われ、話しても聞いてもらえず、専門家支配のもとに置かれてきた社会的弱者」というくだりがありました。彼女は社会的弱者をこのようにとらえているということだだと思います。

以降、基本的な認識として、社会的弱者をめぐる考え方について、大きく3点ご紹介したいと思います。

(2) 社会的弱者とされる要因

まず1点目として、社会的弱者にカテゴライズされる要因にはどんなものがあるかを挙げてみました。所得による差別、ジェンダー（性差）による差別、それから、アクセシビリティというのはかなり広いものを含んでいると思うのですが、身体的能力・学歴・社会的スキルなどによる差別。交通弱者や、「疫学的理由のない隔離」というのはハンセン病などもそれに当たるのだらうと思います。法律的・文化的な差別というのは、国籍・人種・エスニシティによる差別です。

マイノリティというのは、後ほどもう少し詳しく述べたいのですが、派遣切りに遭った非正規労働者なども一時的にはこういった集団に含まれるだろうと思います。それから、情報弱者としては、例えば外国人労働者であったり、ブラジル学校の子どもたちであったり、識字に課題を抱える人たち、インターネットへのアクセスが苦手な人たちもここにカテゴライズがされると思います。

(3) 弱者（マイノリティ）をめぐる二つの論争… 発展と解消

各国それぞれ社会的弱者が何を指すかというとらえ方には差異があり、日本では特にメジャーな論争としてこの二つのとらえ方があるということを、2点目としてご紹介しておきたいと思います。

日本では弱者一般をマイノリティととらえる見方がありますが、これについては異論を持つ方もあります。いわゆる在日外国人や、アイヌや沖縄の人などに代表される、人種・宗教・国籍などにより当該の社会の中で少数派で、発言力も社会的な進出機会も制約されている人々（①のカテゴリー）と、障がい者や部落差別を受けている人、性的少数者など、社会の中で身体・健康・学歴・年齢・生活形態・社会的スキルの有無により発言力が限定され、色々な面で著しく不利で傷つきやすい立場に置かれている人々（②のカテゴリー）がいる中で、「日本では①と②を全部ひっくめて社会的弱者と言うけれども、それはやめてほしい」と主張されている方がいます。例えば、2007年の『マイノリティとは何か』という本の中で岩間暁子さんは、①と②は明確に分けて使ってほしいと述べておられる。在日外国人と障がい者を一緒くたにするなという意味です。

その理由は、在日外国人に代表される①のカテゴリーに属するマイノリティの人たちは、例えば在日コリアンなら在日コリアンという自分たちの特性を終わらせることなく次世代に継承していきたいと思っている、そういう意味では発展を求めているグループですが、②の場合は、発展というよりもどちらかというところこの集団を特徴付けている個性の解消を求めており、身体障がい者がずっと身体障がい者であるという個性をなるべく早く解消していきたいと思っている。その意味で、発展と解消という文脈でいうならば、①と②双方を社会的弱者とひとくくりにするべきでないという主張されているわけです。そうしたとらえ方をしていると、保護を最も必要とするマイノリティは誰かという論争が大きくなった時、それをめぐってこの二つのカテゴリーが対立するのではないか、その結果、どの集団も保護されなくなってしまわないか、という危惧が指摘されて

います。というわけで、今日の私のお話は、①の解釈も多少含まれつつ、②を中心にさせていただくということになるかと思えます。

(4) 三つの態度

3点目として、「三つの態度」とありますが、これは小浜逸郎さんという批評家のご意見を引用させていただきました。この方は『弱者とは誰か』という著書の中で、マイノリティ当事者でない自分がこういうテーマを論ずることの難しさに圧倒されて、何度も挫折しかけたと告白されています。こうしたタイトルで本を書くということは、難しいだけでなく、色々なリスクを背負う、怖い、といった面も意識せざるをえないわけです。

この本でとくに面白かったのは、見た目でも明らかに社会的弱者と分かる方が目の前に来られたときに(他者が)取る態度の分析です。それには、「明らかに差別をする」、「無視をする」、「過剰に気を使う」といった三つの態度があり、そのどれもが不自然なものではないかという指摘です。確かにどの態度もお互いに不自由な感じがするということについては、私も同感です。その結果、彼は、こうした差別意識、弱者意識をいかに乗り越えるか、その考え方の出発点としてはやはり「個別の接触体験を深めるしかないだろう」と言っている。つまり、その人がどんな形でどのような弱者性を内在化しているかということ、対話や接触を深めることで知っていくしかないし、そうした姿勢が必要なのだ、と。つまり、弱者について知り、慣れることで、うろたえたり、自分を押し殺して相手に対応するという、両者間にわだかまる差異への衝撃を必然的に和らげることができるのではないか、と。ここは私もたいへん共感するところです。

しかしながら、社会的弱者について知識を増やし、博識になれば、それで互いの差異を埋められるのかということ、実はそう簡単ではないということも分かっています。

知ることや慣れることで溝を埋めようという提案は、420万部以上売れた乙武洋匡さんの『五体不満足』という本にも書かれています。乙武さんは、先

天性四肢切断という超個性的な姿で誕生されました。この人が「オギヤー」と生まれたとき、最初に彼を見た母親は、「かわいい」と喜んだ、そこから彼の人生自体も個性的なものになっていきます。つまりそれは、こうしたケースにおいて通常予想される母親の反応とは大きくかけ離れたものであったわけで、この事実そのものも彼自身の人生を大きく左右した出来事であったと思われます。

この本には、彼特有の素晴らしい前向きなものの見方があふれていますが、では、同じく身体に障がいを持つ方がこの本を読んだらどのような感想を持つか。あるいは、そのようなお子さまをお持ちの親御さんが読まれたとき、同じような感動があるのか。420万部も売れるほどの感動が当事者同士にも共有できるのかと問えば、実のところその考え方はさまざまに分かれるということを紹介したいと思います。これは、身体障がい者のお子さんをお持ちで、『五体不満足』という本を読んだ、ある父親の感想文です。

「私の子どもは先天性の奇形児です。それを前提にこの感想を読んでください。初めてこの本を読んだのは、子どもが生まれる前でした。そして、障がいを持つ子どもの父となってから読み直してみました。多くの方には申し訳ないが、私はこの本がどうしても好きになれない。同書を読んで感動するというのは、障がい者に対して偏見を持っているからなのではないかと思うのです。『五体不満足』の著者が書いた文章であるから書かれている内容を許しているのであって、これをもし五体満足の間人が書いていけば、多くの方が許していないのではないかと思うのです。私は、著者の乙武さんを障がい者としては見てはいない。普通の、本当に普通の男性として見ている。一人の社会人の書いた文章(自伝)とこれをとらえた場合、私には彼の精神的な未熟さが残念に感じてならないのです。親として悲しいのです」

と、あります。そして、その文章の後に、ビートたけしとホーキング青山という方が書かれた『無差別級トークバトル 日本の差法』という本を推薦され、「これを続けて読まれると、障がい者への視点が多角的になると思います」と締めくくられています

た。

こうした意見と、乙武さんの生き方に賛同し賞賛する意見と、どちらが少数でどちらがマジョリティなのか私にはわかりませんが、大きな評価を受けた一冊の本にもこうした賛否両論はある。やはり社会的弱者を本当の意味で理解するという事は、生半可なものではないとも思うわけです。その意味では、知ること、それによって理解していくことは確かに重要なだけけれども、ではどこまで理解すればいいのか、どのような視点で弱者を理解することが本当に正しきことであるかは、実は誰もわからないことなのだ、そういう前提に立つことが望ましいと私は考えています。しかしながら、私はやはり「知ること」がすべての第一歩であり、何も知らない状況ではどんな共感も生まれえないと思います。

『傷つけ合う家族』～DVの現状から～

先ほども言いましたが、私は「家庭内暴力」からの視点でこの問題を考えます。DVの現状、すなわち「傷つけ合う家族」の問題とは何なのか、まずその現状についておさらいをしておきたいと思います。

(1) 相談状況

皆さんの中で、ドメスティック・バイオレンスという言葉をご存じない方は多分もういらっしゃらないだろうと思うので、定義等は省きますが、この5年間の推移は見ておきたいと思います。

警察庁によりますと、相談件数は平成14年～18年の5年間で、5000件増加しています。しかしながら、本当にDV自体が増えたのか、あるいはDVをめぐる認識が広まったゆえに相談が増えているのかは、まだ明らかにはなっていません。相談の98.8%が女性からであり、こうした問題を抱えている方の7割がまだどこにも相談できていないという統計も存在します。

次に、婚姻関係にある人が72.8%ということになっていますが、今アメリカでもデートDV（カップル間のDV）が急激に増えつつあること、高齢者間DVが目立って増えてきていることも、ここ1カ月

以内に国内ニュースで取り上げられています。

(2) 被害状況

では、実際の被害状況はどうかというと、内閣府の平成17年度の調査で見ますと、女性の33.2%が被害を経験しています。まとめると、女性の3分の1が何らかのDVを経験したことがあることになる。

DVとは身体的な暴力のみを指しているとお考えの方が少なくないので説明しておきますと、「身体的な暴力」はもちろんですが、例えば大声で毎日怒鳴って脅し上げるといった心理的な暴力も含まれますし、妻に働くことを許さないけれども十分な生活費を渡さないという「経済的な暴力」、あるいは自分がけがをさせておきながら医者には診せない、病院に行くことを許さないという暴力や、妻が自由に外出することを嫌い、自分以外の人間との交際を禁じるという、半ば軟禁状態に置く「社会的暴力」もあります。

それから、カップルの中で一番重要な位置を占めているのが「性的な暴力」です。性的な暴力があると、望まない妊娠や性感染症の問題があり、デートDVの問題もそうですが、性的な関係があるかないかと、暴力があるかないかは、相関関係にあるといわれています。性的な関係と暴力は非常に密接な関係があるといえます。

その一方で最近注目されてきているのが、男性の被害者の存在です。資料をご覧くださいと、17.4%の男性が被害者として存在しています。そうすると、先ほどの相談件数の98.8%が女性ということと矛盾するわけですが、これは相談件数と実際の被害の違いであり、男性はなかなか相談に行けないという実態が読み取れると思います。

そして、2001年にDV防止法ができ、被害者が保護されるようになると、加害者は被害者には手を出せなくなることから、逆に被害者の家族が襲撃されるという事件も目立ってきています。ですから、法律による厳罰化が暴力の強力な歯止めになるかといえば、決して十分ではないといえます。

(3) 子どもたちの叫び

最近では、DVの相談でお話を聞いていると虐待が

発見される、あるいは虐待の問題で調べているとDVが発見されるという形で、DVと虐待はほとんどセットだという認識が一般的になってきています。また、母子生活支援施設におられる母子は、統計上でも大半がDV被害によるものですが、実感としては8割以上がDV被害者です。施設は満員がつづき、生活保護を受けておられる母子の約3割に精神的な疾患が認められなど、大変深刻な状況になりつつあります。

子どもにすれば、暴力をふるう父親や学校、友だちとも別れて母親とともに施設に入る。そこで母親が精神疾患になる、小さな子どもたちはこれからどう生きればいいのか。定額給付金をどうするかという論議がずっとつづいていますが、私はぜひ母子施設にいる子どもたちが、18歳まで不安なく過ごせる生活資金と、大学進学を可能とする教育資金に当ててほしいと声を大にして言いたい気持ちがあります。

(4) 誤解と偏見

DVや虐待そのものについては、相談件数も増え、制度や取組もずいぶん広がってきました。が、結果として貧困に陥る世帯も増える一方で、そうした家庭が救済される手立ては少ないだろうと思っています。なぜなら、DVや虐待の問題というのは、さまざまな社会問題、個人課題のしわ寄せを社会的弱者がかぶるという状況です。いじめも同じですが、社会全体の経済的状況が悪くなれば、ますます弱い者が虐げられる社会になることは容易に想像できるわけです。よって、社会全体の底上げが進まないことには根本的解決には至らない。関連の窓口におられる方は今後相当に忙しくなるだろうと覚悟していたきたいと思います。

次に、これほど暴力被害への認識が広がってもなかなか減らないのが、被害者に対する誤解や偏見に基づいた困った発言です。たくさんありますが、いまだに多いのが、「(DV被害者に対して)なぜ逃げないのか」という言葉です。先ほど私は600本以上講演をしてきたと言いましたが、その90%以上が行政からの講演依頼なので、その数だけこの問題について行政の担当者とお話をしてきたわけですから、そこ

でかみ合わないものを感じるのは、担当者が「藤木さん、私は一生懸命DVの問題をやっていますが、今でも、大人のくせに何で逃げないの、という気持ちがあります。子どもは私たちが保護する必要があると思いますが、大人なら自分でなんとかできないのでしょうか」と、私を目の前にして言われる。ケンカしてもしようがないので、「あなたは大変お幸せな人生を送って来られた人なんですね」というしかありません。あとは講演を聞いていただいて。

こうした言葉が出る方は、いいお父さん、いいお母さん、いい兄弟に恵まれたのでしょうか。家族から執拗にいじめられ、追いつめられた経験がないのでしょうか。家の中で誰かに支配されたり、行き過ぎたコントロールを受けてきた経験を持つ方であれば、それがどれほどつらいことかわかるでしょうし、家族だからこそ外部に助けを求められない、自分の生活の基盤がそこにあるわけだからそこからどこかに逃げることもできないこと、それが容易にわかるはずですから。

さらに言えば、先ほどDV被害を受けた生活保護受給者の3割が精神を病んでいると言いましたが、暴力を日常的に受けていると、精神的に良くない状態になってくるのは自然なことです。毎日家の中で脅しあげられ、暴力を振るわれる。それがいつ始まるか、何をきっかけに始まるかも分からない、つねに緊張を強いられ、心が休まる時がない。そんな暮らしを一度してみてください。誰でもおかしくなってきました。それが進むと、「逃げなければ」などという判断ができなくなり、「逃げられる」とも思えなくなってくるのです。

例えば、戦時下で敵の捕虜になり、長期に幽閉された人に対して、「なぜ逃げなかったの」と問いたですことは適切なものか。逃げる元気もない、最後まで逃げおおせる保証もない、どこかで捕まったら今度はどれだけひどい目に遭うか、最悪は殺されるかもしれないと思ったら、恐怖が先に立ち、そう簡単に逃げられるものではないことくらい、容易に想像できるのではないのでしょうか。戦争の体験談はたくさん出版されています。国家による暴力の犠牲になった方々の苦しみを理解できるならばDVや虐待の被

害者の苦しさも分かるはず。どんどん勉強して、想像力を広げていく努力をしていただきたいと思います。

それから、「被害者にも落ち度がある」という言葉ですが、基本的にDV被害者に落ち度はありません。いじめの問題も同じ、いじめられる側に責任や落ち度はないのです。ただ、そうした状況からどのように逃げるか、どのように自分の身を守るかという技術的な問題については様々な方法があるでしょう。それを検討されるのはとても良いこととは思いますが、暴力の責任は、暴力をふるう側、暴力を選択した側にあるのであって、被害者側の問題では100%ないということを、すべての人が理解する必要があると思っています。

加害と被害の同一性 ～問題を起こす人たち～

(1) 崩壊家庭に育って～見えない差別・世代間連鎖するDV

先ほど私は①と②の混合型の社会的弱者だったと申し上げましたが、私の父親は在日韓国人、母は日本人です。そのために父と母は結婚ができず、母は一人で大阪に移り住み、私を出産しました。もちろんそれまでは一緒に暮らしていたのですが、あまりに朝鮮人差別がひどく、別れざるを得なかったという状況がありました。ですから、私は父の顔を知らずに生まれ育った子どもで、それが私の社会的弱者としてのスタートとなっています。

母親は十代でしたが、当時すでに両親と死に別れた孤児であったため、学歴もなければ仕事もなく、家もないという状態で、西成のど真ん中の古アパートで、一人で私を産んだのです。一番困ったのは仕事です。仕事がある町へ行ったら働き、その仕事が無くなればまたどこかの町へ行くという生活は、まさにホームレス母子でした。

そんな中、母親は、父親のいない私に対して、戸籍上、日本人の父親を作っておかないと将来いじめに遭うのではないかと真剣に考え、私という子どもを認知してくれる日本人の男性を探しました。しか

し、そのときに「いいよ」と言ってくれた人にはやはり問題がありました。私の義理の父親となったのは、働かず、借金を繰り返し、母親に暴力を振るう男性でした。その意味では母もDV被害者であり、私はそれをずっと見て育ってきました。そして、私が小学校の4年生の時、母親はあまりの苦しさから自殺を図り、重度の障がい者になりました。脳の損傷で言葉も話せない廃人になってしまったのです。

そこから始まったのが、子どもたちへの虐待です。子どもは連れ子を合わせて3人いましたが、時には私に対する性暴力も含まれていました。孤立した家族であった私たちには行き場がありませんでした。親戚もおらず、引っ越しを繰り返していたので、頼る人が誰もいないという最悪のパターンにいたわけです。家の中で起こっていることは誰にも見えませんし、一応外から見れば両親がいると思われまので、他者はまったく介入してきません。どちらか欠けていたり両方がいないなら施設のお世話になることもできたのですが。

一度、小学校5年生のとき担任の先生に助けを求めたのですが、あえなく失敗に終わりました。私の家庭に対して全く関心を持たなかったばかりか、私をおかしな子だとみなしただけでした。それをきっかけに私は、「二度と大人に話すまい」と誓ったのです。

今の子はどうか分かりませんが、小学生に、警察に行くとか役場に行くという知恵は期待できないとすれば、学校の先生しか訴える人がいない。しかし、それに失敗したら、もう二度と人に話そうとはしないものです。これはDV問題の支援をしている人にとっては常識で、最初の相談に失敗すると二度目はない、あるいは次の相談まで非常に長い期間がかかる。だから最初の相談で失敗するな、とはよくいわれることです。相談を受けるということは、それほど重要な任務を背負っているのです。

最も深い心の傷は、やはり義父から受けた性暴力でした。虐待はもちろん子どもの心身に大きく影響しますが、とりわけ性暴力というものは、ケアをきちんと受けなければ、精神的に問題をかかえることがめずらしくありません。以前、私に着目したある

精神科医に、「藤木さんはなぜ病まなかったの」と聞かれたことがあります。ある面、病んでいたと思います。子ども時代は感情がほとんど動かなかったですね。人が笑っていても泣いていても、なぜ笑っているのか泣いているのか、よくわかりませんでした。そして自分の心の中をまったく見ようとしないので、無表情でしたし、友達関係が続きませんでした。自分の感情を押し殺して生きるというのは、冷凍庫に自分の感情を放り込んで急速冷凍させたようなもので、成人して解凍するまでに何十年もかかりました。

私は、この状況を脱出するためには、自分が成長して経済的に自立して家を出るしか手はないと考えようになりました。そのためにどうしたらいいかということを考え、生きていくための手段として、勉強は一生懸命やりました。非行に走ったり何か問題を起こしたりすると、家の中で虐待があることがばれてしまう。それが恐ろしくて優等生を演じていました。ですから、私は非行に走って暴走している子どもたちを見ると、ある意味で健全だな、しっかり暴れているな、と感じます。私は暴れることすらできない子どもだったわけです。

そんなことで、私は高校を卒業したその夏にすぐ結婚しました。結婚すれば男の人が食べさせてくれる、この家と決別できると思って結婚したら、その相手はDV加害の男性でした。彼は11歳年上で、東京の大学を出た県庁職員でした。私も結婚して国家公務員になりましたから、恵まれた結婚であり、経済的にも何の問題もないと周りから思われていましたが、家の中はめちゃくちゃだったのです。いつ暴力が始まるか分からない、いつ終わるか分からないという中で、常におびえて暮らしていました。いつもいつも夫の顔色を見て、もし彼が怒りだしたら、どうしたら早く終わってくれるか、どうしたら痛くないか、どうすると軽く済むのか、どう言うかと機嫌を直してくれるかといったことしか考えていない。

彼が暴れる理由はこれとって無いのです。だから、こんなことが起きているのは自分にだけだと思っていました。当時は情報が全くありませんでしたから。情報が無いというのは恐ろしいことで、世界

の中でこんな目に遭っているのは自分だけ、誰にも理解してもらえないと信じ込んでいましたし、私の場合は、実家にはあの義理の父親がいるから帰ることもできない。結婚なんてこんなものと考え、何とか離婚しないで済むよう努力するしかなかったのです。

ですから、先ほど「なぜ逃げないのか」という発言がありましたが、DVの被害者は自分で何とかしようと考え、ひとり頑張っているわけですね。何とか自分の力で解決できないか、何とか自分の力で夫の暴力をやめさせることはできないか、そう考えて頑張り続けるのですが、何年経っても、暴力はマシにならない。暴力は嗜癖の一つですので、人によってはそれで快感を得ている。つまり、弱い立場である妻に暴力を振るうことによって、加害者自身が自分の人生における様々なストレス状況に対して自己再生を図っている、これがDVですから、暴力は自然に終わることなどないのです。憂さ晴らしの典型というケースもあるわけです。子どもや妻を脅して、足元にひれ伏させて「ごめんなさい」と許しを乞わせることで、男としての尊厳を保とうとする。つまり、そうしなければ自尊心を保てない、自我の脆弱な、幼児的な男、それがDV男性の本質です。それを被害者である妻が何とかしようと思っても非常に難しいことです。妻が耐えれば耐えるほど、さらに暴力はエスカレートしていく。「俺を怒らせたのはお前だ。お前の言葉、態度、ふるまいがおれを怒らせるのだ」といって暴力の責任をすべて妻に転嫁し、一方、妻は「すべて自分が悪いのだ」と思い込まされていく。何年も経てば経つほどその状況が固定化され、最終的に妻は逃げるということを思いつくことすらできなくなり、すべてをあきらめてしまう。すると、これが自分の人生だと考え、暴力がない間にコーヒーを飲んだりテレビを見たりすることに喜びを見だし、暴力自体をどうにかしようとは考えなくなってしまう。そのうちに歳をとる、あるいは成長した子どもから離婚を勧められる、といったことも起きてきます。

私はかつて、ある県でDV被害女性たちが一堂に介した集まり呼ばれたことがあります。その日は高

年齢の方が多く、80歳になっていた方もいらっしゃったと思います。彼女のDVのお話は壮絶で、「今でも夫と一緒に暮らしているけれども、お互いに体があまり動かないので、もちろん彼はもう私に暴力を振るうことはできないし、床に伏せているときが多い。けれども、一度もご飯など作ってやる気持ちはない。私は私で自分の分だけ作って2階で暮らしている。彼はどうしているのか知らない」と言っていました。つまり、逃げる機会あるいはDV関係を解消する機会を逃したその女性は、その後、夫の収入で最後まで自分のめんどうをみさせるけれども、彼の世話はまったくしないという報復を選択したのです。

私はこの女性を非難などできないし、そうした生き方もあると思います。やみくもに離婚を勧めているのかどうかは大変難しい問題です。私は以前、大阪城で、DVから逃げてきたというホームレスの女性に会ったことがあります。DVとホームレス、どちらを選ぶかといった状況がまだある中、「とにかく家を出なさい」とは言えません。少しばかりの暴力ならば、住む家があり、食事に困らない方がいいというケースがまったくないわけではないのです。究極の妥協でしょうけれど、残念ながら被害女性が生涯にわたり支援を受けられる保障も制度もない今、それが現実だということです。

私が最終的に家を出られたのは、何か大きなきっかけがあったとか、誰かが来て助けてくれたわけはありません。本には詳しく書きましたが、ずっと「おかしいな、おかしいな」と思い続けていた中で、周囲の人がかけてくれた言葉や、ぼそっとつぶやいた一言がなぜか強く心に残る、そんなことの積み重ねが、最終的に私を家から出ていくよう仕向けてくれたのです。その後、様々なことがあり、私が本当に安全になれたのは、私が出たあと、3年後に元夫が突然亡くなったときでした。なぜ亡くなったのかについてはよくわかりませんが、地方公務員の彼が、なぜあれほど荒れ狂った酒漬けの生活をしてたのかということを見ると、自らを死に至らしめたと言えなくもない。その意味で、彼の死を知らされても、それほど驚きませんでした。わずか40歳

ぐらいで亡くなったのですが、恨むよりもむしろ、大変気の毒な人だったと、涙は出ませんでした。心からそう思いました。彼は幸せだったのだろうか。なぜあんなに暴力を振るったのだろう。彼が亡くなったときから、DVとは何か、虐待とは何か、本来愛すべき対象の家族に対して狂ったように暴力を振るう人間の正体は何なのかといったことを、私はずっと考え続けているような気がします。

家庭における暴力は、夫から妻だけではなく、妻から夫の場合もありますし、昨今は子どもが暴れる問題も大変深刻になっています。その意味では、性別、上下、立場に関係なく、暴力が増えてきている。今朝も、中学2年生の男の子が、顔を洗っていたお父さんを背中から刺したというひどいニュースが入ってきていました。理由は本人が自らの引きこもりを何とかしなくてはと実行した、ということでした。最近、友達と「家で寝るときに、部屋に鍵をかけておいた方がいいかもしれないね」と冗談を言ったことがあります。私たちは自分の子どもに殺されるかもしれないという時代になってきたのかもしれない。

やはり私たちは、暴力はなぜ起きるのかを、もっと真剣に考えなくてはいけないと思います。テレビを見ていても、暴れる子どもの事件に対し、コメンテーターがよく「動機が分からない」と言っていますが、私はそんなことはないと思っています。私は、そうした事件が起きた状況、背景を少し聞いただけで、子ども自身が病む要因は十分あったと思うことがよくあります。世間は追い詰められた弱者の心情に大変鈍感だと思うばかりです。

(2) 後遺症との闘い～自尊感情を取り戻す

次に暴力による後遺症についてお話しします。

虐待を受けている時や、DVで殴られたり蹴られたりしている時は、確かに痛いし怖い。しかし、そんな中でも「こうしたら殴られても痛くない」、「こうすると怪我が軽く済む」、などと考えつづけて緊張状態がつづいていきますから、実のところつらさを実感する暇はありません。本当のつらさは、そうした状態からすっかり解放された時に来ます。もう誰に

も怒鳴られない、殴られない、蹴られない、私はもう安全に生きていくことができるのだ、という安心を手にした瞬間に、最大の問題がやってきます。長期間に渡り人から虐げられてきたことが原因となつての後遺症がドッと出てくるのです。

その時初めて、被害者は自分の感情というものに向き合います。人間は安心しないと感情など出てきません。「こうやって逃げよう」「ああやったら許してくれるかも」と色々神経を張り巡らしている間は、自分の感情にかまっている暇はありません。殺されるかもしれないと思つているときに、悲しみに打ちひしがれることはできないのです。私は、これで本当に安心できる、と思つた時、感情が一気に出てきました。文献によると、全く虚脱状態になる人もいれば、ハイテンションになったり、うつ状態になったり、人によって違うようですが、私の場合はものすごく「怒りの感情」が噴出し、そのために人を傷つけるようになっていきました。

この、被害者が加害者に転じていくという体験は、自分の身をもって知つたことです。社会不信、人間不信の塊になって、人を見ればまた自分を傷つけるのではないかとしか思えず、職場に行ってもケンカばかりです。コピー用紙が切れてると指摘されただけで、陰悪なメモ事に発展する。「何でいつも私だけに言うのですか。私が嫌いなんですか」、と嘔みつくわけです。相手にしたら、「何でこんなことで怒るのか」と思いますよね。当然、人間関係は悪化し、私は幾つもの職場を去りました。

誰とも仲良くできない、人との距離が分からない、けれども孤立したくないから人の言いなりになってしまう、など、うまく人間関係を築けない。攻撃的になったり、従属的になったり、人に対する態度がコロコロ変わり、ちょっとしたことですぐ切れる。それはスーパーに買い物に行っても、銀行の窓口に行っても、郵便局に行っても、役場の窓口に行っても同じです。ちょっと相手が気に入らないことをした、ちょっとお釣りを間違えたというだけで、相手に食ってかかってくる。心の中に平安がないので、毎日疲れてへとへとになります。私はなぜこんなに毎日人ともめているのか、トラブルを起こしている

のか、そして周りの人を傷つけているのか。

その後、私は勉強をしました。自分の状態を知るために。そして、26年間も家族から暴力を受けてきたせいで人間関係が築けなくなっているのだということがわかりました。自尊感情を全く喪失していたのです。暴力とは、そこから逃れられさえすればそれで済むのではない、その後の被害者へのケアを抜きに暴力への取り組みを語ることはできない、それを私は身をもって体験したわけです。

(3)『立ち直り』のプログラム～就労意欲と社会への信頼を回復する

こうした経緯を経て、昨年、私は博士号を取りました。学位論文は人から傷つけられ、働けなくなった人間の心の回復を目的とした実践研究をまとめたものです。僭越ながら、私をほぼ社会復帰した人間として見てくださっている方が多く、「なぜ藤木さんは立ち直れたのか」という質問を今まで数限りなく受けてきました。その答えとして、私はかつて、自ら考案した社会適応のためのプログラムを自分に課して、自ら変わろうとした時期があります。その方法は、医師や専門家に頼らず自分自身で考えた方法で、後に専門家に、「それは認知行動療法という方法ですよ」と指摘されたことがあります。要は、暴力や人からの支配によって一時的に低下した社会的スキルや、歪んでしまった認知を、日常生活の行動パターンや考え方を変化させることを積み重ね、あるべき姿に戻していくという方法です。私はそれを2～3年かけて自ら取り組みました。

ここでその内容を詳しくお話しする時間はありませんが、自分のネガティブな行動パターンや思考パターンを変えていくプロセスは忍耐力が必要でした。要は、人から誘われたらこう対応する、断るときにはこのような断り方をする、人に何かを頼むときにはこのように頼むというように、実際に自分が話す言葉や自分のふるまい、態度、所作をあらかじめ決め、そのとおりに実行するのです。

始めは慣れませんが、だんだんうまくやれるようになり、人とのトラブルが少なくなってきます。すると、自分自身の中に自信が生まれてきて、「自分は

やっつけていけないのではないか」「人間関係がちゃんと築けていけないのではないか」という思いが芽生えて来る。そのうちに友達ができ、恋人ができ、結婚して子どももでき、そしてNPOも、学位もと。社会的弱者としてスタートし、社会不信の塊、被害者意識の塊であった私が、今は社会に貢献できている。あのプログラムがなければ、私はおそらく今だに被害者としての人生だけを送りつづけていたのではないかと思います。

このように、自分が暴力の傷から回復することができた方法をしっかり体系化・理論化して、日本中におられるであろう様々な傷つきを持った人たちの更生に役立ててほしいと願い、5年半かけて博士号を取得たのです。現在は更生施設と母子生活支援施設でプログラムを実施しつつ、個人向けセッションも始め、手応えを感じています。

(4) 更生施設の人々…『子ども時代を剥奪された者の文化』／アリス・ミラー

こうした結果、被害者と加害者は、どちらも傷ついているという面では全く同じであると私は考えています。「加害と被害の同一性」と書かせていただきましたが、加害者はどこかで被害を受けた経験を持っており、被害者を放っておけば加害者になる、そうしたサイクルがあると考えています。

アリス・ミラーという精神科医は、問題を起こす人々は、子ども時代に子どもとして愛されるという権利を保障してもらえなかった人たちである、と指摘しています。子どもには愛される権利があるのに、その権利を剥奪され、子どもとしての時代を過ごせなかった人たちは、何らかの形で問題行為を起こしていくのだという発想です。実際、私が今関わっている更生施設や母子施設に入所している人たちは、たくさん問題を抱え、苦しんでいます。ほぼ全員が子ども時代を剥奪された人たちであると言えるような背景を持っています。

問題を起こす者は傷ついた者なのだという発想を持たなければ、相手を理解しようという気持ちが出てきません。問題を起こす者は排除すればいい、という考え方では、社会は何も変わらないばかりか、

悪化する一方です。排斥された者は報復を試みるからです。こうした現実、私たちがこれから社会を構築していくにあたって、しっかりと認識しておかねばならないことだと考えています。

社会的弱者への理解と共感

(1) 『安全なまちづくり』とは

～ある福祉施設建設をめぐる～

去年でしたか、ある県で更生保護施設を建設するにあたって、住民と行政が対立したという報道がありました。更生保護施設とは、刑務所を出た人たちが一定期間衣食住を保障されながら就労先を確保する施設ですが、住民の許可なく建てたという非難が起り、「オープン反対」と、集会でもめる姿が報道されていました。住民側は説明がなかったことに対して怒っているのだと言い、県側は説明はしたと言っており、両者の言い分は食い違っています。しかしながら、住民側の意見をじっくり聞いてみると、少し違うかなと思う意見も混じっています。その施設のすぐ近くの小学校に子どもを通わせている若い母親は、「こんな施設を小学校の近くに作って、子どもに何かあったらどうしてくれるの」と、叫んでいる。社会的弱者に対する理解、とりわけ司法的な措置を受けた人たちに対する理解がほとんどないのです。刑務所とはどういうところで、少年院とはどういうところで、その中にいる人たちはどんな人なのだということについて、まったく情報がないのだろうと思いました。

いかがでしょう、矯正施設を出て、行き場所のない人たちが当てもなく街をうろつくことの方がよほど危険な状況を招くと思いませんか。去年、刑務所を出た人が、おなかが空いてその日のうちに郵便局を襲ったという事件がありました。私たちだって、家族や親戚とまったく縁が切れていて住まいも所持金もなかったら、そうならないとも限りません。更生のための手立てを充実させないことの方が、街を荒らすことになるのです。私たちはそうした現実をもっと学ぶ必要があるし、一般住民の理解を深める方法に頭をひねることが大切だと思います。

アメリカではこうした施策の試算が非常に上手で、刑務所で一人入れたら幾ら、年間で幾らという計算をしっかりと積み上げて、だから更生にこれだけかけましよう、国民をしっかりと説得する力を持っています。根拠のない偏見や差別に対抗するためには、理詰めで、予算ベースで問いかけ、理解を得ていくという方法が今後は非常に重要になってくると思います。

(2) 社会のまなざし～無力化とスティグマ

誰にも、ある日突然、社会的弱者になるということが起きる可能性があると思います。私は、さまざまな事情から転落した人たちの苦しみに向き合ってきました。最終的にホームレスになって保護され、更生相談所や一時保護所を通過して更生施設に来られる。もちろん皆さんは公務員なので職を失う可能性は極めて少ないでしょうが、例えば思わぬ病に倒れて突然「患者」や「中途障がい者」という社会的弱者になることはあるかもしれませんね。

そういった状態になった人たちがまず体験するのは、普段の自分らしさがどんどん失われていくということです。それまでは頭がちゃんと働いて、抑制の利いた生活を送っていたのが、体も心もコントロールができなくなって感情的になり、家族や友達に対する信頼も低下し、周囲との関係性が切れていくような錯覚に陥り、孤独に落ちていきます。経済的な問題がそこへ加われば、実際に家族が離れ、自分も家を出なくてはならないといったことになり、意欲や対人関係能力は低下する一方となります。

社会的スキルとは、人間が対人場面において適切な対処をする技術を指しますが、社会的スキルが低下していくと、人と話すことができなくなったり無気力感が増したりして、そのうち死を切望するようなことも起こります。私が関わっている更生施設には、自殺に失敗した人が少なくありません。そういった人たちの受け皿や支援の枠組みをしっかりと作ることが、この社会の活性化のためにも重要なのだらうと思っています。

施設ではご飯とベッドが提供され、お風呂も週2回入ってもいい。しかし、職を失い、家を失い、家

族を失った人が死に損なって来た施設の中で、それだけで元気になれるでしょうか。私は違うと思います。そこにもう一つ必要なのが、人と人との交わり、関わり合いです。

ある新聞記者がコラムで、「社会の最後のセーフティネットは、人の思いではないか」と書かれていましたが、その通りだと思います。プログラム自体が人を癒すというより、グループでプログラムをすることで人と人とが交わり、語り合い、そして人が思いをかけ合える場をつくる。そこにまた傷ついた人たちが参加する、という自助・共助のしくみが、更生施設だけではなく、地域をはじめ、さまざまな場所に必要なのだろうと考えており、今後もそこに力を入れていきたいと思っています。

また、みなさん、支援を必要としている弱者を見て、「この人は、なんとひどい人生、ひどい運命の下に生まれてきた人なのだろう」と感じることもあるかもしれませんが、人生には失敗も成功もないと私は考えています。学びが多い人生と、学びが少ない人生があるだけで、失敗や成功という言葉で置き換えることはできない、と。どんな人生にも意味があり、目的があるからです。その意味で、どんな人生もいいものだ、それが私の信条です。

これでいったん私の話を終わりたいと思います。重要なところを言い漏らしたかと思っていますので、ぜひご指摘いただきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

【マッセ O S A K A セミナー講演録集 vol. 18より
転載】